

受賞のことば

池田 澄子

思い掛けない協会からのお電話に、私、イケダスミコですけど間違いではありませんかと申し上げて笑われました。でもチラとも思ったことのないことでした。

ひたすら私は俳句を書いてきただけでした。書けたかもしれない、と内心喜ぶことが出来るようにと、それだけ考えていました。四〇歳に近く「群島」という結社に入れて頂いて主宰・堀井鶏先生と先輩たちとの句会の楽しかったこと。先生の俳句の読み方考え方はとても広くて、ダメなときにはダメと言ってあげるから自由に作りなさいと仰るのでした。初期の頃、今思えば既にありそうな出来上がった感じの句を句会に出句して沢山点数が入ったとき先生は、「ああイケダスミコがこう書いちゃダメだな」と仰ったことを覚えています。偶々それは事実であり実感だったのですが今は分かります。堀井鶏が私に求めたものが他にあったということが。

堀井先生がいろいろな方々をお願いして下さって、当時、入会には選挙があった現代俳句協会の会員になったのが、確か協会の三十五周年、椿山荘でお祝いのあった年でした。「群島」以外の俳人たちにお逢いした、というよりは、見た、あのときめきを懐かしく思い出します。

その後、更に厳しさが欲しくて三橋敏雄を師として選び、押掛け弟子になりました。その後、堀井先生は、持っていらした三橋敏雄句集『眞神』を、僕の生き形見だよと私に下さいました。三橋先生に初めて見ていただいた五十句は、辛うじて〇が五句。先生は結社の先生ではなかったので、個人的にいくらでも教えていただけました。先生はなかなか〇を下さらないし、私も諦めませんでした。そういう俳句との格闘が一生続くものだと思いに思っていました。先生が〇と仰ったらそれで私の俳句生活は〇、という筈の日々は、突然の敏雄逝去によって終わりました。その日から二〇年過ぎ、気が付くと堀井鶏、三橋敏雄の享年を私は越えていました。

私の俳句は、師より学び師と異なった何かを生むことが課題でしたが、どこまで書けたのか心細く、終わりがなく、これからも気が抜けません。

そのような、ただひたすら俳句の為に俳句を書いてきた私の、俳人としての態度を理解していただけた、可として下さったことに、驚きながら励ましていただきました。

俳句という詩形式に対して失礼のないように、そして愉しく厳しく真摯に、これからも書いていきなさいという大きな励ましをいただきました。有り難うございます。